第一部　義経北行伝説

霾神社参拝

〝義経は衣川では死なずに北へ向かい、大陸でチンギス・ハンになった〟

この義経チンギス・ハン伝説は、拙著を初めて世に出して下さった「でくのぼう出版」創業者の著述家、故山波言太郎氏が生涯をかけ追い求めていたロマンでした。

私自身、母の実家が平泉から三〇キロほどの町（宮城県栗原市若柳）にあったことから、幼少期、叔父に連れられて中尊寺、毛越寺など奥州藤原氏ゆかりの地を何度も訪れていました。今でも私のアルバムには、義経、弁慶の顔出しパネルで撮影した写真が残っています。この地では、奥州藤原三代と義経、弁慶は、現代においても変わらぬヒーローなのです。

ちなみに、平泉にほど近い奥州市出身の大谷翔平選手が、シーズン中のホームランセレモニーでかぶっていたあの有名な兜は、義経のものと全く同じです。また、大谷選手のお父様が、壇ノ浦における義経の八艘飛びをイメージして「翔」を、そして平泉にちなんで「平」を選び、「翔平」と名付けたことは地元で広く知られています。八〇〇年の時を超え、義経の御霊が大谷選手の超人的な活躍を応援しているかのようで、興奮を禁じえません。

前章でも触れましたように、令和四年五月、谷地村直美さんの主催により、高野誠鮮氏との対談が青森県八戸市で行われました。

幼い頃からの思い入れがあり、いつか義経伝説をゆっくり追いかけてみたいと考えていた私は、八戸に数多くの義経北行伝説が残されていることを知っていました。それだけに、今回の八戸訪問は、私を大いに刺激し、心の中に抱き続けてきた願望を思い出させてくれたのです。この機会を逃す手はありません。

長年の念願を果たすため、私は谷地村さんに、講演前にもし時間があったら、義経伝説にまつわる場所をぜひ案内してほしいとお願いしてみました。当日、谷地村さんは会場を離れることができなかったものの、谷地村さんに頼まれた橘さんが見事に私の期待に応え、是川縄文館とともに二つの重要な神社、「小田八幡宮」と「竈神社」を案内してくれたのです。

初めに訪れた「小田八幡宮」には、義経が鞍馬の毘沙門天の像を安置して祈りを捧げたと伝えられる「毘沙門堂」と呼ばれる小さな祠がありました。

拝殿から少し離れた場所にある毘沙門堂に参拝するため、祠の手前の小さな赤い橋を渡った時、私は空気感が変わったことを感じました。あたかも、祠全体が凛とした神聖なエネルギーに包み守られているかのようでした。

同行されていた三木歩さんが撮影された写真を示します。

撮影された三木さんに確認したところ、全く通常のモードで撮影したとのことですが、垂直であるはずの祠の柱には傾きを感じますし、私の背後の木々の葉は焦点がぼやけています。

また、祠の手前上方からは光が射し込んでいますが、さらによく眺めると、祠の奥の林にも、丸いレンズ状の

透明な光が浮かんでいるように見えます（拡大写真　矢印）。

あたかも空間がゆがんでいるかのような祠の雰囲気に驚いた私は、八戸から帰宅した後、さっそく佐々木勝三氏の『源義経と成吉思汗の謎』を読み直してみました。

すると、今回訪れた二つの神社が、義経北行伝説を語るにあたり、とても重要な場所であることを知ったのです。

明治二八年、岩手県宮古市で生まれた佐々木勝三氏は、当時としては珍しい米国留学を経験しており、国際経済学者としての活躍が期待されていた方でした。

しかし、佐々木氏は自らの感性に従い、八〇〇年近く東北の各地で語り継がれてきた義経伝説を深く探求していこうと決意されます。そして、

小田八幡宮にて（2022年5月14日、三木歩さん撮影）

三十数年にわたり義経北行コースを発掘し続け、ついに全路完全踏破を成し遂げています。その結果、義経伝説やゆかりの史跡が東北地方のあちこちに数多く残っていることを確認したのです。

さらに驚いたことには、史跡は見事にほぼ一線に義経が自害したとされる衣川から蝦夷へとつながっていました。しかも言い伝えのどれもが、義経一党はその場所にとどまらずに立ち去ったというものばかりだったのです。

義経北行伝説が大いに注目を浴びたのは、蝦夷地の開拓が本格的に進み始めた江戸期でした。この時代にアイヌの間に義経伝説が色濃く残っていることが明らかとなり、義経、弁慶にちなんだ遺跡や地名も数多く発見されました。

大正期には、日本軍の通訳として満州、モンゴルに渡った小谷部全一郎氏、陸軍の特務機関員として、満蒙を工作のために動き回った横田正二氏が、大陸での義経の足跡を丹念に追っています。

この章の前半ではまず、義経の蝦夷までの足取りを追跡してみることにしましょう。

義経は衣川では死んでいない

清衡、基衡に続く奥州藤原氏三代目の秀衡は、兄源頼朝により朝敵とされた義経を匿いました。しかし、秀衡の死後、後継となった泰衡は、鎌倉からの圧力に抗しきれなくなり、ついに義経を追い詰め、自刃に追いこんだと伝えられています。その結果、稀代の天才戦略家であったはずの源義経は、衣川で泰衡麾下長崎太郎、次郎率